



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

4

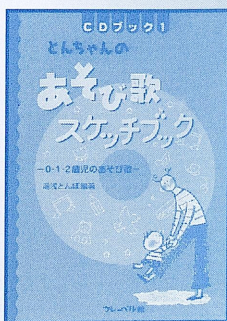


第102巻 第4号 日本幼稚園協会

CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック①
とんちゃんのおそび歌スケッチブック
—0・1・2歳児のおそび歌—

好評
発売中!



湯浅とんぼ / 編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

CDブック②
わんちゃんのおそび歌パラダイス
—3・4・5歳児のおそび歌—

好評
発売中!



犬飼聖二 / 編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第102巻 第4号



幼児の教育 目次

— 第一〇二巻 第四号 —

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 保育における「におい」を見直す

— バーチャルリアリティを超えて — 金田 利子 (4)

特集〈はずむ〉

からだがはずむ、心がはずむ 村田 芳子 (9)

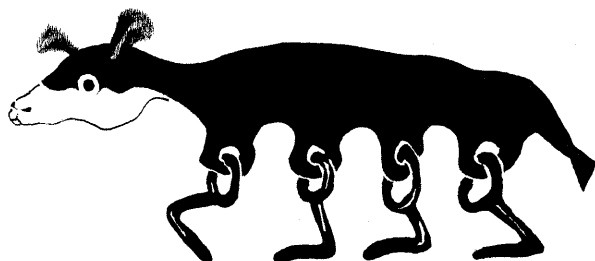
はずむ心をつくる身体 鈴木みゆき (14)

もののはずみでダンゴムシ協会 宮里 和則 (18)

はなまるエピソード、ポンポーン すとうあさえ (22)

生きものの共生の畝間から(12)

菜の花を摘む、夏野菜をまく、植える 徳野 雅仁 (26)



ポジティブサポートの世界(1) ポジティブサポートに出会う…村田 愛…(28)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(1) ステンシルで飾ろう…浜本 昌宏…(37)

子どもと笑い(1)―生活にもっと笑いやユーモアを―…今井 和子…(38)

ある日…(46)

障碍をもつ幼児の保育(9)―この子と出会ったとき―

手を使うこと その四…津守 真・津守 房江…(48)

ちよつとした緊張感から感じたこと…吉岡 晶子…(58)

表紙絵／南塚 直子

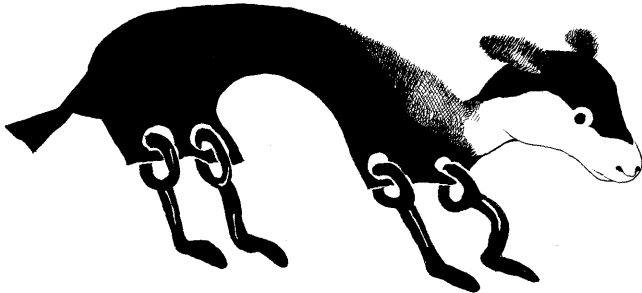
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ワイヤー」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子





巻頭言

保育における“におい”を見直す

―バーチャルリアリティを超えて―

金田 利子

どんなしごとも、みんなにおいがありますよ
パンやさんは、メリケン粉とミルクのにおい
だいくさんのそばをとおると、かんなくずのにおい、のこくずのにおい
ペンキのにおいは、かんばんやさん
パテのにおいは、ガラスやさん
うんでんしゆさんのかわのジャケツは、ガソリンのにおい
こうばのしょっこうさんは、あぶらのにおい



お菓子屋さんは、おいしそうなミルクのにおい

おいしゃさんは、きもちのいいおくすりのにおい

はたけのにおい、土のにおいは、すきをウマでひかせるおひやくしようさんのに

おい

さかなと海のおいがするのは、おさかなやさん

なんのにおいもしないのは、しごとをしない人だけです

この詩は、今よりまだ生活のなかに仕事の姿があった頃に、「おい」についてうたったイタリアのジャンニ・ロダーリという詩人の作品の一部（西郷武彦訳）である。

近年、「子どもたちの体験が、バーチャルが中心になり、直接体験が少なくなってきた」と言われ、そのことが問題になってきている。一方、「人権とは想像力である」とも言われ、実際に体験しなくとも体験しているかのように他者の立場に立てる想像力が「共生」の基本になるということもまた事実である。想像力を育てるには、まず直接体験が必要であり、それなしの、視聴覚メディアによる間接体験だけでは、真の感性が芽生えず、知的好奇心も想像力も育ちにくいからこそ問題になっているのだと考えられる。

では、バーチャル体験では得られない感覚は何か。それは、五感のうち視聴覚より



も、もつと下位のレベルにある触覚、味覚、嗅覚による体験ではないか。一般的には、下位のものが前提になって上位のものが発展する（二足歩行が基盤になって、指差しなど手指の力が育ち、それが前提となって言葉が形成されていくように）。感覚も、触・味・嗅覚が前提となって視聴覚の世界をリアルなものにすることができるといえる。実際、生活がこうした下位の感覚が交差した関係で成り立つとき、リアリティをもち、想像力の基礎になる。味覚は実際に味わってみてこそ、触覚もまた、触ってみてこそ機能する。

ここでは、保育の中で、比較的对象化されることの少ない、しかし、関係者が気づいているよりも強烈なもののある嗅覚の働きによる「におい」について取り上げたい。

次は、最近筆者が講師となった放送大学静岡学習センターの面接授業の中で、最近の子どもの状況について、受講生（四十九歳・男性）の提出した感想文の一部である。

「……現代っ子は、何でも映像では知っているが、実体験が乏しい。私の例で言えば、羊は写真で見て知っていたが、忠ちゃん牧場（静岡県内）で羊を見たとき、ものすごい糞の臭いでぶっ倒れそうになった。写真や言葉では、この糞の臭いは体験も表現もできない。（現在壮年期にある自分の子どもの頃でさえ、そうなので）今の子どもたちの多くは、『直接体験障害』と言えるのではないか」

ぶっ倒れそうな糞の臭いや、一方では、さまざまな草木の花・果物の匂いがあり、それらが交じり合って、自然の、それもそれぞれの季節の「におい」を嗅ぎ分けられると



ころに生命の妙味と喜びがある。大分前の秋、富士宮市の野中保育園に院生たちと訪れたとき、一人が開口一番「この園にはいろいろな〃におい〃がある。コスモスの香、諸動物（山羊・鶏他）や土・草木の匂いが入り混じって何とも不思議な〃におい〃がある」と。

そしてさらに見ていくと、保育における〃におい〃は室外の自然環境だけではない。子ども一人一人に〃におい〃がある。ある一歳児クラスでのこと、記名のない衣類の持ち主を探しあぐねている保育者に、子どもたちは、〃におい〃で嗅ぎわけ、正確に示してくれたという。親しくなると、姿は見えなくても声だけで誰とわかる。なんと、ここでの子どもたちは〃におい〃だけで、誰と識別できる。園においては、言葉以前の子どもたちが、〃におい〃を通して互いの人格・存在を尊重しあえていることを示している。幼い頃からさまざまな人のさまざまな個性につながる〃におい〃に接し、それぞれを尊重する体験は共生観を育成する上での基盤ともなろう。

ここで、先のロダリーの詩に戻ってみよう。この詩から、〃におい〃は、自然の生命そのものの息づかいであるとともに、自己の生命を燃焼させ、その成果を他者と自己の生命に活かすという人間独自の社会的活動である「仕事」にまで発展させるとき、人間・人格を象徴するものになることがしみじみと伝わってくる。自分らしく生きるのと、それは自分独自の〃におい〃を持つことに、また、他者のそれを尊重する「共生」



て、どちらかといえば心や言葉が優先されがちな大人の社会や学校の中で、こうした「からだからの発信」の意味と可能性は高いと思うのです。

ここに子どもがはずんで踊る写真があります。

「はずむ」というテーマを頂いたとき、真っ先にこの写真の小さなダンサーの姿を思い起こしました。

ずいぶん前に撮影したもので、ここに写っている彼女は今はすっかり大人になり、しかも本物のダンサーとして活躍しています。たしか彼女が二歳か三歳の頃のもので。音楽がかかるやいなや、飛び出した彼女は全身でリズムをとり、リズムに合わせて両足でドンドンとたたきつけるように跳びはね始めました。そのはずみは次第に大きくなって、片足で交互に跳びはね、それは自然にスキップになって移動を始めました。移動の中にはターンやジャンプまで加わって、その自由なソロのダンスは音楽が止まるまでよどむことなく続きました。そして、踊って

いる間中、それこそはじけるような笑顔です。からだ全部が笑っているようです。「子どもってすごいなあ、すごい力を持っているんだ」と眼に焼き付いた最初の時でした。

このように小さな子どもは、音楽ひとつで自然に踊り出します。リズムにのってスイングし、全身はずませ、跳びはねる。何も教えられなくとも、動き方を知らなくても、自由に動き続けます。まさに子どもは皆踊りの天才です。その姿を見れば、「人間は本来踊る存在である」ことに気づかされるはずです。でも、いつから自由からだがはずめなくなるのでしょうか。いつから心がはずめなくなるのでしょうか。いつのまにか踊ることに恥ずかしさやカベをつくってしまった子どもも大人も、その奥底には踊る欲求が眠っているはず。いったんリズムののっけはずんで踊ってみれば、「気がつけば誰だつてダンサー」になれるのだから……。



このように、リズムにのっちはずんで踊る楽しさ
は、リズムへの陶醉がもたらす快感、人間が本来的
に持っている「律動の快感」に根ざしており、ここ
に踊りの原点があります。だから、「はずむ」とい
うこと、とりわけ子どもがはずんで踊るという行為
は、人間の身体表現やダンスという行為を教育の面
からずっと追求してきた私にとって、大変重要な
テーマなのです。

ここで、「はずむ」という言葉の意味を挙げてみ
ましょう。広辞苑によれば、「①物に当たる勢いで
はね返る。はね上がる「マリがはずむ」②息づかい
が激しくなる。「息がはずむ、胸がはずむ」③調子
づく。形勢がよくなる。「話がはずむ」「嬉しくて声
がはずむ」④機に乗ずる。つけこむ。⑤思い切っ
てする。⑥思い切って多分に金銭を出す。奮発する。
おごる。「祝儀をはずむ」というように、この言葉
には、単に物がはずむ状態から身体や呼吸そして心

がはずむ状態まで実に様々な意味を含んでいます。
また、「はずむ」が「弾む」の他に「勢む」という
漢字が当てられるように、共通して「勢い」や「調
子」のよい状態を示しています。つまり、内にある
パワーが外に勢いよく現れ出た状態、それが「はず
む」ことなのです。

更に、子どもの好きなスキップという動作は、交
互に片足で跳ねながら走るもので、はずむ動きに移
動が加わったものです。しかもその「タツカ、タツ
カ」というリズムには規則的な拍を破るシンコペー
ションがあつて、その変化が難しいけれど面白いの
です。このようにスキップは、「はずむ」と「走る」
というシンプルな動きからその組み合わせへ、規則
的な拍に合わせることからそれを破るリズムの変化
へと自然に発展した動きととらえられます。この辺
りに子どもを夢中にさせるスキップの秘密があ
るのかもしれませんが、また、子どもがはずみやす



ソではずんでみましょう。自然に笑顔と会話がはずんでくるはず。それが子どもの心とからだの扉を開き、そのパワーは大きな可能性につながりま

す。「はずむ」ことは、子どもの未来を拓くことなのです。

(筑波大学)

はずむ心をつくる身体

鈴木みゆき

「はずむ」という言葉を聞いて、真っ先に思い浮かぶのは、二十年前、長女が保育所で習ってきたある手遊びを披露してくれた時の表情です。こぶしをとんとん打ち鳴らし、メロディとまでは呼べないけれどフレーズを口ずさみ、それはそれはうれしそう

に、目を指したり口を尖らせたり……。ああ、この子の心はずんでいいる！ 娘のその躍動感が、私の中に飛び込んできたような一瞬でした。世の中、何が起ころるか、わかりません。私は娘と一緒に遊ぶ中で、「手遊び」の楽しさを発見し、一緒に作った作



いうオトナと付き合うのにつかれたから？ 原因は

何だろうかと考えました。なぜ、私は彼（彼女）が「はずんでいない」と感じるのだろうか？と。ある時、一緒にままごとをしていて、私の中に彼（彼女）の遊んでいる表情が飛び込んでこないのだと気づきました。子ども達は、遊びの中で様々な表情を見せてくれます。一緒のジャングル探検に行けば、ワニにも出会うし、ゴリラにもなります。子ども達は本当にそこに作り出せるのです。ワニに出会ってしまったら！ ゴリラになってバナナを食べたら！それはもう、ドキドキ、わくわく、「はずむ」オノマトペの大洪水です。でも、気にかかる子どもは、そうではないのです。

遊んだ後で、保育者と話し合いをすると、保育者からも「気になる子」として名前が挙がったりします。そして「実は朝食を食べてこなくて……」「午睡から目覚めないの……」という生活リズムの間

題に話の焦点が移っていくのです。

リズムという言葉にひかれ、学生時代からお世話になった先生を訪ね、もう一度勉強しなおすことにしたのは、この「はずまない」心との出会いからです。勉強していく中で、ヒトが「リズムの動物」であることを、子どもの成長がリズムによって支えられていることを知りました。リズムは「はずむ」時間軸上のゲシュタルトです。例えば、朝、目覚めと共に体温は上昇していきます。動いていいよ、というサインです。「早起きは三文の得」かもしれませんが、夜、ぐっすり眠っている時に、成長ホルモンが集中して分泌されます。「寝る子は育つ」。これは正しいのです。

昨年、保育所に協力を仰ぎ、一歳児の睡眠―覚醒リズムの調査をしました。保育者が、案じている子ども達の中に、午睡から起こす子どもが多く、「指差し」「喃語」の発達に有意差があり、人の気持ち



もののはずみでダンゴムシ協会

宮里 和則

「こんにちは、日本ダンゴムシ協会の宮里です」

最近はどうあいさつすることが多くなった。

日本ダンゴムシ協会は、ダンゴムシで遊ぼう、

レースをしようという協会である。

おかげさまで色々なところに取り上げられ、知られることとなったダンゴムシ協会だが、その誕生はまさに「もののはずみ」だった。

私は別に筋足動物の研究者でもマニアでもない。

私は児童館の職員。どちらかといえば、虫などに夢中になっている子どもが好きなのだ。

ダンゴムシ協会を立ち上げたのは、一九九六年春。新しく赴任した児童センターで土が嫌いだという子どもたちに出会った。確かに今の都市生活は、土を嫌う。マンションの階段に土が持ち込まれた



そこでレース前にダンゴムシツアー（ダンゴムシさがし）をすることになった。これもはずみだった。がツアーに出かけてみると、これは大変面白いものだとわかった。

まずダンゴムシ好きの子どもたちが、自分の秘密の場所を次々に紹介してくれる。ふだん児童館ではボール遊びしかしない子がこんな生活（遊び？）をしていたんだと改めてその子を見直したり……。私にとつて子ども再発見の時となった。

そしてたくさん街の人と話す機会になったということ。ダンゴムシのいそうなプランターやト口箱を見つけると、持ち主を捜し出し、「すみません。ダンゴムシさがしているんですが……。この植木鉢動かしても良いでしょうか？」と尋ねる。初めはビックリしていた人も、笑ってOKしてくれる。「今の子どももダンゴムシで遊ぶんですか」「懐かしいなあ……」。

これには二つ良いことがあった。一つはダンゴムシが捕れること。そして二つ目は、次に会った時にお礼が言えること。街の人とつながることが少ない都市の子どもにとつてこれはとても大切なことだった。

そして、何といつてもダンゴムシさがしは、くじ引きと同じ様な面白さがあった。この石の下にいうだと思つて持ち上げてみると、ア리가びっしりいて「きゃー」となったり、まだ眠っているカエルにあつてしまつたり……。そして、ようやく見つけた時の大喜び……。

さてこんなツアーを終えて帰つてくると……。思いがけず七十人もの人が集まつてきたのだ。

ダンゴムシやその仲間たちが土を作っていることや、どんな生き物にもその役割があることなどを話し、レースを始めることにした。

レースは二重円を書いてそのまん中にダンゴムシ



追伸…今日本ダンゴムシ協会ではダンゴムシの事件簿を募集中です。ダンゴムシにまつわる事件、面白

いエピソードがありましたら、ぜひお知らせください。

はなまるエピソード、ポンポーン

すとうあさえ

夫「きょうは、だれと遊んだの？」

私「かずちゃん、しんぺい君」

夫「えっ、でも、かずちゃんとしんぺい君は気があ

わないだろう」

私「そうよ。だから、この子は大変だったのよ。か

ずちゃんと少し遊んだら、今度はしんぺい君って

いう感じで、大いそがしよ。毎度のことだけど

ね」



んていい子だ」「なんて面白い子だ」とおおらかに受け止めて笑っていたときの、あのあたたかな平和的雰囲気ただようノリです。

会話がどのように展開するかといいますと、まず、朝の散歩担当の夫から、お散歩エピソードをききながらニコニコガヤガヤと朝食をとり、夜は夕方散歩担当者やその日家でまると一緒にいた人を中心に、「きょうのまるちゃん報告」で、盛りあがりながら夕食、という具合。その内容は、「きょうは、だれと遊んだ？」と「まるは、ほんとにカッワイイんだから」の二つは必然的に入ることになっていますが、その他は、枯れ葉が風に舞つてとぶのをまるが追いかけてかわいかったとか、桜の枝をくわえて歩く姿が「木枯らし紋次郎」みたいだったとか、工事監視員のおじさんに、「立派な犬だね」とほめられてうれしかったとか、たんぼの綿毛をとばしたら、びっくりしてワンツとほえたとか、見事に、ほ

んと見事に、犬馬鹿会話一色。関係者以外には興ざめするような内容ですが、私たち家族にはかなり癒し効果があるようです。その日にいやなことがあっても、まるの話聞いて笑うと一気に楽しくなって、気持ちまではずんできちゃうのですから不思議です。

会話ははずむといえ、私が担当している幼稚園の遊びのクラスの後も、パートナーの千春さんとうまく話が盛りあがります。はずみをつけてくれるのは、子どもたちのすてきな感覚です。例えば「きょう、げんくん、コンクリートの穴に絵の具で色をぬってたら、その穴が急になんかこわい生き物が住んでいる池にみえてきちゃってね。面白かったねえ」とか「私が内緒話をして、誰にも言わないでねっていったら、ちずちゃんが『私の心には言ってもいい？』って言ったのよ」というように、しばしうっとりしちゃうような話もあります。夢の世界に

菜の花を摘む、 夏野菜をまく、植える

徳野 雅仁

コマツナ、カブ、サントウサイ、ハクサイ、チンゲンサイ。畑を黄色に染めるこれらの花は春の風物誌です。野菜づくりでは、トウ立ちが収穫期の終わりを意味し、食用としての価値は軽視されがちでした。しかし、この花蕾には子孫を残すための養分が蓄えられているため栄養価が高く、春のビタミン補給に大いに利用したいと思います。菜の花の収穫は、花が一―二輪開き始めた頃、花茎の上部一〇―一五センチをポキッと横に倒して折りとります。約一〇秒、サッと塩ゆでしたおひたしや菜の花漬けのほか、半日、薄塩に漬け炊きたての御飯にまぶす菜の花めしなど、美味しい菜の花料理が楽しめます。

四月に入るとハコベが急速に生長。オオイヌノフグリやホトケノザが畝を覆い緑一色になります。ソラマメが開花し、サヤエンドウがツルを伸ばす頃、夏野菜のタネまきや植えつけが始まります。サヤインゲン、トウモロコシ、エダマメは中旬から。ジャガイモ、シユンギク、サラダナ、ラディシユはいつでも、サトイモ、カボチャは下旬からです。またツルムラサキ、オクラ、モロヘイヤ、シソ、ニガウリ、キュウリなど低温では発芽しないものは五月に入ってからまく方が失敗しません。トマト、ナス、ピーマン、トウガラシの苗の植えつけも五月に入ってからですが、タネまきや植えつけ適期は栽培する土地やその年の気温によって臨機応変に行い

ます。土が肥えた自然栽培実践地では、サトイモ、ジャガイモは無肥料、無耕耘で雑草をかき分け、こぶし大の植え穴を掘り、タネイモを植えつけるだけで育ち、美味なイモが収穫できます。

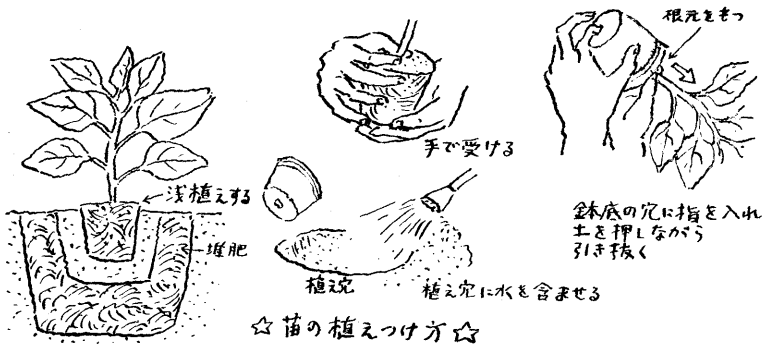
トマト、ナス、ピーマンの定植は晩霜が終わり、地温が高くなってからです。春の地温は気温ほど高くなく、晴れた日に気温が二四度あっても地下一〇センチの地温は一九度。ほぼ四―五度は低く、二センチ低くなるたびに一度ずつ地温は下がります。トマト、ナスは地温一九度以上、ピーマンは二二度以上。トウガラシは最も寒さに弱く地温が二二―二三度以上で定植します。いずれも植えつけ後に地温が低いと障害が出て育ちません。

苗の植えつけは風がなく暖かい日の日中に。植え穴に水を打ち、日光に当て地温を高めてから植えつけます。苗が倒れないよう深植えしがちですが、深植えするほど地温が低くなるため、必ず浅植えし、掌で土を押さえれば苗は倒れません。

子どもの頃に見たトウモロコシ畑やマクワウリ畑、菜の花畑など四季折々の野菜畑で出会った感動は、未だに忘れがたい思い出として心に残っています。タネまきから収穫まで野菜が育つ姿や、生きものとの関わりを学ぶなかで、子どもの心に何かひとつでも思い出が残ることを願っています。

――終――

(イラストレーター イラストも筆者)



ポジティブサポートの世界(1)

ポジティブサポートに出会う

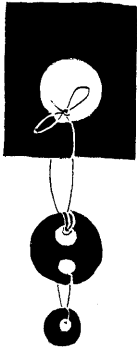
村田 愛

私は、八歳の時にある養護学校に出会い、数人の子ども達とお友達になりました。今思うと、私達は言葉でコミュニケーションをとっていた訳ではありません。しかし、それは、『人と太くつながる』今の私の原点となる体験でした。現在は、知的障害のある人を対象にポジティブサポートというセッションを行っています。この連載では、ポジティブサ

ポートとは何か、その中心となる考え方を紹介していきます。今回はその導入として、私が特殊教育の実習で疑問を感じ、生きる道について考え直し、そして、ポジティブサポートに衝撃的に出会った話をします。その中で、ポジティブサポートの根幹であるへその人中心の考え方の一端を感じていただければと思います。

大学一年生の現場体験

ニューヨーク大学に入って、特殊教育を勉強しはじめた私は、一年生ではいろいろな養護学校や特殊訓練校や施設にほぼ毎週、見学につれていかれました。それは、特殊教育専攻の必須科目の一環で、いろいろな種類の場の体験を基にディスカッションをして、その後レポートを書くことがその科目の主な内容でした。客観的にその場を見学し、私達学生がその場について問題提起をどれくらいできるか、私達の将来のビジョンの柱（こんな風にはなりたくない／こんな風にしたい）を作り上げる最初のステップです。さらに、それぞれの場の改善策のようなも



のが明確に提示できたら、まずは言うこと無し！
日常の体験を振り返り、次につなげるということ
が、将来の“教育”に携わるであろう人たちには欠
かせないことです。それを習慣付けることも兼ねて
いたと思います。

何が問題？

一年生では、特殊教育という科目もあり、様々な
障碍の種類や特徴を本で学びレクチャーされる科目
もとりました。ところが、私は当時、「特殊教育を
専攻したのは、障碍の多様な種類や特徴、学校／施
設で用いられるアプローチを情報として知りたいと
思っただけではない」と思い、苦しかったのを覚えてい
ます。本や講義で伝達される“ドライな”情報が多
く、頭がいっぱいになってしまい、最初はただ「私
に向いていないのかも」と考えました。でも、十歳
くらいの時からの私の夢が、こんなにあっさりとお

手上げという形で完結してしまうのもスッキリしない悔しさが残る。もう一度、自分がなぜ特殊教育を勉強したいと思ったのかを考える必要がありますました。

私は、なぜ苦しいのかを考えているうちに、漠然と『人が見えない』というのが私にとって問題なのだと思付きました。大学生として、本や情報を通して「人が見えない」教育を受け、「人が見えない」教育をする為の勉強をしているかのように感じていました。けれど、私達は、関係の中に生きています。本や情報だけで、そこにいる「人」を理解することはできません。多様なアプローチを知らされても、問題解決と処理ができないものもたくさんあるでしょう。それが、その頃には具体化できなかった私の苦しみだったように思います。

実際に見学に行くと、学校の先生や施設の職員

が、「そのポリシーが何か」を話してくれてから、その現場を見に行きます。見学中、「なぜ手の届かないようなところに実用的であるはずの棚があるのか」、「なぜそんなにもカギが多いのか」、そして、「なぜ外からカギを閉めるような部屋があるのか」

など学生の私達が質問します。そうすると、積極的に見せてくれ、あたかも正当な理由があるようにお話ししてくれる人もいました。例えば、「刺激が強すぎて落ち着かなくなつた時には、自主的にその部屋に行きたいと申請するように教えている」、または「落ち着かなくなつたら、『イエローカードだね』と忠告して、それからその状態の強弱と継続する時間を計測し、それによつては、『レッドカード』で自分を傷つけられないように壁も床もマットのようなものでカバーされた部屋につれていく」という話でした。そういう話をしてくれる人は、へその人の為〜と信じていたと思います。

ところが、どのような意向で独房のような部屋を

使うか、という話を聞いても、私には「ざわざわするものが残るだけでした。なぜその様な部屋が学校に存在するのだろうか、理由を話されても、へ自主的に」という言葉を使われても、寒気がするのです。自主的という言葉がふさわしくないのです。セルフコントロールができるようにという目的だといわれても、わたしには罰としか見えませんでした。その独房に入れたとしても、何の「解決」にもならないし、何も始まらないのではないか、と思えました。ただ、そこで手にとるようになるのは、その連れていかれる生徒の行為が教師によってどうとらえられたかということだけです。つまり、そこでは、その生徒本人にとって何なのかということは問題にされていないのです。「独房」につれていかれる人の姿や表情を見ると、私は何かしたい衝動にかけられました。「それは、そこに人がいるから」とこ

れもまた漠然と思っていました。

混乱している私、レポートを書く？

入学から解放された後、そんな支えきれないような気持ちを持ち帰りながらも、レポートを書かなくてはなりません。そんな時は、混沌とした状態で、感情的で抽象的な、誰に投げかけるでもない疑問・質問ばかりを提示していたと思います。でも、そこで言いたかったことは、「私だったら、ある行為のとらえられ方で独房に入れられるなんて悲しすぎる。そして、ある行為に対して決まった行為で応答するような立場にもなることはできない」ということでした。

ディスカッションで話していても、楽にはならないし、整理もできない。その方法論が間違っていると考える人も、そこではそれが必要と考える人もいて、ディスカッションがヒートアップすることもあ

りました。でも、私は、そこで外部から短時間客観的に見て何かを攻めることが、建設的に何かに反映されるのか？ などと考えていました。そのディスカッションでも「人」が思い浮かばないのです。

そのへ間違った方法論を訂正し改善でき、そこで生活している人達や子ども達が過しやすいようにすることは重要だと確信しているけれど、どうすればいいか。なにが表現したいか。まずは私が私の中を整理しなくてはと思えば思うほど途方に暮れました。

私の最も関心のあることは、人との関わりの中で生まれたり変化することです。ところが、その頃要求されていた行為は、組織的な考え方、規律、問題に対するアプローチに基づいてどう考えるかを話し、まとめてレポートとして書き出すということでした。私にとっては、それらは人が見えてはじめて大事になることだと感じていました。しかし、私には、「人が見えない」のです。「人が見えない」ま

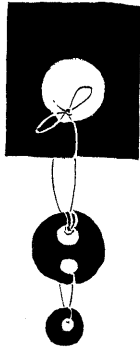
ま、すでにできあがっている何か（組織）に直面しているようで、私には大きすぎ、混乱していたのでしよう。

順番が逆

大学二年目には、養護学校での集中的な実習が始まりました。実践を重要視するアメリカの大学では、一つの学校で週に二十時間の実習を一学期間継続的に行います。卒業するまでには、少なくとも四学期間、すなわち四校へ実習に行くことになりました。それは、私にしてみると、やっと物理的に人に接し「人が見える」という救われる体験のはじまりとなりました。どこに行っても、「私だったら……」ということを考え、その生活空間・環境をとらえてみることを始めたのもその頃です。『人がいて集団があり、組織がある』という明解なことが実感できると、以前感じた苦しみ、混沌としたものが自分の

中で形になって整理され、エネルギーがわいてくるようになりました。私にとって重要だったのは、
「その行為に何が表現されているのか」ということ
でした。「問題行動」をせざるを得ない状況は、その人にとってかなりの葛藤でしょう。その行為を
「問題行動」として処理される人の気持ち、が私には
気になって仕方がなかったのです。

後にポジティブサポートを紹介してくれた教授
キャロル (Dr. Carol Gotthelf) のクラスをとったの
も同時期でした。キャロルは、『カギ反対』、『自己
決定促進』などを徹底的に具体的に推し進めるとい
う姿勢で授業を展開していました。私達が使う言葉



にも注意をはらうべきである、と口癖のように言
いました。学生が「問題行動」という言葉を使えば、
それは、誰にとって問題なのか? と問いました。
キャロルは、「問題行動」は、その環境に問題が
ある時に起こる」と言うのです。ほぼ毎回の授業で
キャロルは、具体的に考えるべきことを羅列したも
のを私達に配ります。例えば、問題行動として、その
「行動」問題、もしくは「問題」その人」という
見方は間違いである。そして、「問題行動」は必要
だから起きていると考えるべきだと言いました。
なぜそのようなことになったかを考え、どうして
いくかを考えるには、私達が振り返り反省します。
具体的には、1. その人に選択肢は存在したか、
2. その人に伝わりやすい方法で状況を伝えられたか、
3. その人が表現しやすい方法を熟慮し提案して
あったか、4. 難しいこと／苦手なことを一度に長
時間要求しなかったかなどを考え直します。

それは、その人の立場に立つて考えてみることに、その状況を客観的に見てみることを要します。その頃に、〈問題行動―対策〉というアプローチの仕方に対する私の中で消化できなかった何かが、少しずつ明確になってきたのです。問題だけに焦点を当て、解決しようとするのではなく、より望ましいアプローチとは、その場・状況、そして〈その人〉を最初に考えることが、必要なのです。いろいろ〈対策〉を試してみてぶつかるといふことは、もしかしたら、まだ〈必要なこと〉が充分にできていないからではないかと考えるようになりました。常にそうして〈必要なこと〉を考えていけば、〈問題行動〉が起る必要のない環境が整うのではないかと信じられるようになってきた時期かもしれません。

そして、ポジティブサポーター！

学期も後半に入ったキャロルのクラスでは、ポジ

ティブサポーターを紹介されました。それは、衝撃的でした。まずは、ポジティブサポーターの思想的な部分を紹介され、「人」のとらえ方は多面的であるべきだと言われました。つまり、学校で見えている子ども達の姿はほんの一面でありそれ以外の生活空間（家庭内）や人間関係などもふまえる努力が不可欠であるということでした。それがその子どもの多面性を明らかにして、生活の中に連携と協力をつくり出し、できるだけ建設的な学校生活を創るカギを握るのではないかということを実感しました。

ポジティブサポーターの実際は、一人の人の将来を、本人とまわりの人と共に、建設的に、その人の多面性、可能性、個性を生かし作っていく作業です。その中心となるのが、セッション（実践）で、その子どもに関わる人々が集まり、そこで掲げられる課題について好意的・肯定的に順番に発言していきます。課題はそこでファシリテーターによって掲

げられたもので、それは、例えば『くちゃんの好きなこと』などから始まります。

私達は、実習先でポジティブサポートのセッションを実際に行って、自分なりにそこからその子どもの近い将来を考え、クラスで発表することという宿題を出されていました。それは、驚くほどに気付いていなかったその子の多面性が見えてくる体験でした。そして、そこで想像力を使ってその子の将来を考えるということ、そしてそれが楽しいものであるということも新鮮な体験でした。しかし、その頃にもまだ、ポジティブサポートの偉大さは知らなかったと言えるでしょう。セッションを一度行ってみただけでは、ポジティブサポートの偉大さは分からないものです。

その後、私達のクラスに、ゲストスピーカーとして、色々な協力者と共にポジティブサポートを完成させたベス・マウンツ博士 (Dr. Beth Mount) が来

たのです。

ポジティブサポートと出会って

ポジティブサポートとの出会いは、私の人生に大きく影響を及ぼしています。私がポジティブサポートに魅かれたところは、可能性に基づいて作っていく作業であることです。「人が生きる」ということを考える時、変わることを強いられたり、枠におさまることを要求されることに抵抗感を持つのは、自然なことだと思います。私は、『その人らしく生きる』が大切だと考えます。ポジティブサポートは、その人らしく、納得し、協調性を持った、輝いた生き方ができることを示してくれているように思いました。何かを壊して、変えるのではなく、そこにある現実から始めて、築き上げていくという発想のポジティブサポートには、その人にとってより望ましい環境や将来を考えていく力を促す原動力があ

ると思います。

人が見えない「組織」に向き合うという課題は、私には大きすぎて負担にしか感じられませんでした。「順番が逆」に感じていたのです。『そこに人がいるから』そこから考え、展望を持ち、将来像を協力的に作り出していくという発想のポジティブサポートに安心感を覚えました。

混乱していた時を振り返ると、その時の私は、行き詰まり、視野が狭くなって、「今が将来につながるっている」ようになど感じられませんでした。私に「問題」だと感じていることに耳を傾け、私なりに解決することをサポートしてくれる人を必要としていたことに、キャロルとの出会いが気付かせてくれたのです。私を感じる問題がある時、それを解決するのも結局は私です。そして、そのような時に必要としているのは、〈問題解決対策〉ではなく、私自身が、解決することをサポートしてくれることだった

のです。それをポジティブサポートで参加者は感じるのでないでしょうか。

対策にとらわれるのではなく、その人やその人が置かれている環境を協力してとらえ直すことの大切さに気付きました。そうしてはじめて、それぞれの人が社会の中で生きる上で、その人が必要としていることを考えることができるのだと思います。その人の現在をまわりの人と共にとらえ直し、その人の多面性を大切にすることが、「その人の生き方」を考えることを可能にするのではないのでしょうか。この様なポジティブサポートの視点をもつことで、〈今〉から〈将来〉に向けて立体的に展開し、人や現実、そして将来が、膨らみを持って見えてくることを実感させてもらったのです。

(ポジティブサポート研究室主宰)



手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(1)

浜本昌宏

ステンシルで飾ろう



写真でお分かりのように、悦びに満ちた子どもの笑顔は最高ですね。そこに学習や発達につながる、充実感があればこそその発現です。

ステンシルは、薄くて水を通さない紙に、形を切り抜き、刷り込み刷毛やタンポなどで、色彩をすりこみます。色を使い分けたりすることで、すてきな飾り模様が出来ます。保育者があらかじめ幾つかの型を作っておき、まずはそれを使って形を刷り出す体験から始めてもよいでしょう。(上の作例参照)

写真の子ども(四歳)は、紙を四つに折ってハサミをいれ、タンポに絵の具をつけて(スタンプ台から)刷り出したものです。色を違えたり混ぜ合わせたりして、「ほら、これ、すてきでしょ」と大満足。

生活や文化を創り出す、能動的な人間発達を促す、基礎的な表現活動の一つです。
(元・三重大学)

*タンポはフェルトや布など *スタンプ台は、小さな容器で「てるてる坊主」のように フェルトや布を敷き、絵の具を加えます。

子どもと笑い(1)

—生活にもっと笑いやユーモアを—

今井 和子

子どもの笑いが弱くなっている？

離婚や失業などが急増し大人の生活が脅かされると、その余波がたちまち子どもたちにもふりかかり、今、子どもたちの笑顔や笑いがとても少なくなっているように思えてならない。笑いは、人の心と心が触れあうこと、つまり人とのコミュニケーションを生み出す最も有効な手段である。笑いは、言葉と異なり民族や文化の違いがあつ

ても誰とも通じ合える人間の生得的な機能でもある。

乳児においては、自分の世話をしてくれる母親との関わりがうまく成立せず、泣いて要求を訴えることすらしなくなったサイレントベビーの出現が浮き彫りになり十数年が経過した。この間、子どもの育つ環境はますます悪化している。育児の伝承がなされないまま母親になり、子育ての仕方がわからず、泣く子を前におろおろしてしまう母親。わからないことを誰にも相談できず不安

が募るばかりの孤独な母親、そのために生じるストレスが乳幼児に与える影響は測り知れない。一方、情報機器（テレビやビデオ、テレビゲームなど）による過剰な刺激、雑多な情報が乳幼児に送り込まれ、子どもたちは大脳疲労を起こし、人のことばを心に刻み込むスペースも失っていると本で読んだ。さらに共働きの親たちは、長時間労働や時間に追われるハードな生活のためゆとりを失い、ついつい子どもを追いたててしまう傾向にある。親がわが子と一緒に暮らすことに楽しみや喜びを見出せない状況を生み、子どもの表情が硬くなっていることは、子どもからの緊急を要するSOSではないだろうか。

大人と子どもの豊かな人間関係を回復するために

お母さんや周りの大人から豊かな愛情を注がれた子は「愛される喜び」を実感し快活に育っていくことはいくらでもない。ほおずりをしてもらい、抱きあげられ、

「いないいないばあ」で笑いあい、大好きな母親の印象を体に刻み込む。そして、日頃の快感や喜び、笑いの源が、いつも「お母さん」なのだと思いつくようになる。その、子どもの笑顔こそ、親や保育に携わる者の宝、生きる力の支えではなかったか？

大人と子どもの関係は、大人が一方的に子どもに影響を与えるのではなく、大人も子どもからことばに尽くせない喜びや力を与えられているはずである。子どもとのやりとりを楽しむことにこそ育児や保育の本質があることは昔も今も変わるはずがない。大人と子どもの信頼関係を回復するため、まずは「笑うことで楽しくなる生活」を始めよう。子どもと一日一回にらめっこすることもいい。大人が子どもに向きあえば、子どもは必ず笑い出す。子どもの未来は、笑いからスタートするのだから。子どもは小さいことを大きく喜ぶ、天性の楽道家ではなかったか？そして嬉しいことがあるとその喜びや楽しさをもっと増幅しようとふざけたり、おどけたりして

笑いを広げる。ところが、大人の機嫌が悪かったり、ゆとりがないと、「なに馬鹿なことやってるの!」「ふざけるんじゃない!」ともみ消されてしまう。笑いやユーモアは、それをおかしいと理解する相手があつて成立する。子どものユーモアやふざけをどれほど楽しみ共に笑えるかが大人の心身の健康のバロメーターではないだろうか。

楽天的な生き方を子どものことばに見出す

私は二十数年間、保育所で子どもたちと暮らし、子どものことばに散りばめられたおかしさやたくさんのナンセンスを楽しませてもらった。

四歳ののり子ちゃん。朝登園すると嬉しそうにこう言った。「先生、のり子、赤ちゃんの時、なめくじだったの」「えっ、そんなはずはないでしょ」と私が何度訊いてもなめくじなんだと言いはった。そこで夕方、お母

さんが迎えに来たので確かめてみると……じつは、朝、のり子ちゃんが生まれた時のアルバムを書棚から引っ張り出して見ていたので、お母さんが「のり子は、赤ちゃんの時、未熟児だったのよ」と話したが何のことやらわけがわからなかった様子。「未熟児・すなわちなめくじ」と思い込んでしまったのである。私たちが顔を見合わせて大笑いすると、何を笑ったのかわからないのに、のり子ちゃんも一緒になって笑い出した。笑いはまちがいない、人に伝染する。共に笑うことで『この人たちと一緒にいるって楽しい』という幸福感を味わうことができる。

四歳児のクラスの子どもたちと散歩に出かけた時のこと、前方から歩いてくる細身のおばさんを見たとも子ちゃん、「あのおばあさんおなかが大きいね」とつぶやくと、一緒に手をつないでいたみずきちゃん、「しらがの赤ちゃんが生まれるんじゃないの」というので私は思わず大笑いをしてしまった。本気でそう考えたようなの

で一層おかしさが増した。子どもたちの思考や発想の側面を垣間見る楽しさを味わった。

ただしくんがお風呂場で髪を切ってもらっていると、切った髪がただしくんのおちんちんの上にはとっ。それを見て驚いたようにただしくん。「ぼくおちちうえになっちゃった!」

よしみちゃん五歳、長いことトイレでがんばっていたが出てくると、「おかあさん、うんちがかたくてゆげが出そうやったわ!」

みやびちゃん（五歳）「おとなってお仕事行かないじゃないんでしょ? ねえおかあさん、先生はお仕事なにしてるんだらう。毎日、あそんでばかりいて、お仕事いく時間、あるのかな。おとななのにねえ……」

みつるくん（五歳）「先生、ぼくのおかあさん、忍者保育者」どうして?」

みつるくん「だって、お皿なげるんだもん」

ころんで膝の下を打ったひでやくん（六歳）「人生には、痛いこともあるんだ」

じゅんきくん（五歳）「世界中で、みずぼうそうって、誰がさいしょになったわけ? その人、誰にうつされたわけ? なんかへんじゃん、そうでしょう?」

子どもは今が楽しければそれで十分、と思っているのか? 笑っている時、ほんとにいい顔になる。

『今の、この楽しさのために生まれてきた……』
と言わんばかりの見つめ



でも、見つめ尽くせない、いい顔になる。

笑いの効用

「笑い上手は生き方上手」ということば通り、人は笑うことによって心の緊張を解きほぐし、ストレスを解消する。また笑うと体の免疫力が活性化するということで、最近では病気の治療に落語などの笑いを取り入れ治療効果をあげている病院もあるときく。

笑えないのは、体や心がかたくなり、「揺り動かす」反応が出せなくなっているからだと言われる。腹式呼吸の効用と同じように体や心を笑いで揺らし、いやなことを消去させよう。子どもたちは、大人のようなおいしいものを食べたり、音楽を聴いたりなどのストレス解消法を持ち合わせない分、遊びに熱中すること、笑うことが最も効果的な癒しになる。笑いこそ健康のカンフル剤でもあることを肝に銘じたい。

笑いが起きる条件

『子どもの笑いは変わったか？』（村瀬学者、岩波新書）という本を読んでいたら、笑いとは何か？ という章の中で次のような興味深い記述があった。

「笑い」は、目の前で起こる「出来事」とそれを「見ている人の立場」との「組み合わせ」でしか起こらない。まず「笑い」が起こるためには、そこにある何か「くずれる」変化が必要だ。ころぶとか、間違えるとか、失敗するとか、へまをするとか。そんな場面が「笑い」の説明に引っぱり出されてきたのは、そこに「型のくずれ」があったからだ。例えば赤ちゃんにひよつとこのような「顔くずし」をしてみせると「笑い」が採れる。しかし何か「くずれる」というだけでは「笑い」にはならない。知らないおっさんにそんなことされた赤ちゃんは、きつと泣き出すだろうから。

「くずれ」が「笑い」になるためには、もうひとつの条件がある。それは何か？ 笑う人の側の態勢、心の構え方だ。例えば入試に合格したこと、宝くじに当たったことが大笑いなのではない。そうではなくて、頭の中にまず「たぶん、合格しないだろうな、当たらないだろうな」という悲観的な予想がはじめにある。ところがこの悲観的な予想に反して「合格」「当たり」になった。ここで「大笑い」「ばか笑い」となる。何が起ったか？ 要するに一度失ったものを「もう一度手に入れた」ことになったわけだ。ここに「くずれのもどし」と呼ぶ「状況のひっくりかえし（逆転）」が見えてくる。実は、この「くずれのもどし」という「ひっくり返し」がないと起らないものだった。「くずれ」がくずればなしにならないで、どこかに「立ち直る」ことが意識されているということだ。——中略——

赤ちゃんは「顔くずし（ひよっとこ顔）」だけで笑うのではなく、その人がよく知っている顔に「もどる」と

いうことの子測があつて、笑うのだ。「笑い」というのは、このような「くずれ」と「もどし」の方向が逆転する「二つの運動」がうまく「組み合わせたとき」生じていたものだった。

三、四歳ぐらいになると、大人から注意されて笑う、とか、恥かしくて笑つたり、自分を笑うことができるようになるのだが、じつはそれだけ自分への洞察（予測と結果の組み合わせ）ができてのことだったかと……納得するものがあつた。

絵本やお話、あるいは日常生活の中の、どういう場面（状況）で子どもがよく笑うかを観察することで「子どもの笑い、その条件」を解くことができそうだ。今後の課題である。

生活にもっと笑いを

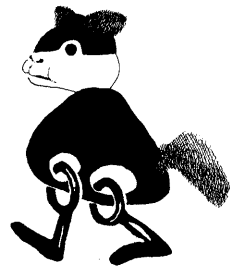
年長児たちと公園や原っぱによく散歩に行った。目的

地に着くと子どもたちは、同じ遊びをしたい仲間と帰りの時間まで虫とりや基地ごっこを楽しんだ。ところが帰りを告げる約束の時間になっても仲々集まって来ないグループがいた。「もう帰りの時間なのに、いつまで遊んでいるつもり!」。私はおなじことばかり言っただけ帰るよう

に促したが、そのグループの子どもたちは、虫とりに夢中で少しも私のことばを聞き入れようとはしなかった。そこで、私はある時いいことを思いついた。丁度園では、広告紙の二段重ね、三段重ねジェット機とばしが流行していた。その日も、相変わらず戻ろうとしない子どもたちの所に近づき、あらかじめ用意していたジェット機に、手紙をのせて彼らのところにとばしたのである。「あっ、手紙をのせた飛行機だ」「○○ちゃん、読んで!」。そこで一人が声を出して読み始める。「もう待ちきれません。先に帰ります。遅くなる人はこのジェット機にのって帰ってきて下さい。いまい」「うわっ大変だ。先生たち帰っちゃうよ!」。かくしてどの子ども血相を変

えて約束の所に戻ってきたのである。言われるよ、書かれたものを読むことは、年長児には何と効果があることか――。

生活の中にナンセンスをいっばい送りこむことで、保育者も子どもたちもいつのまにかしつかりと心をつなぎあえるようになるように思う。



子どもたちが少しも保育者の話を聞こうとしない時、かつては「お口はチャック、手はおひざ」など威圧的なことばで子どもたちを静めようとしたこともあった。しかし、群馬県に伝わる「ことばあそび」を知ってから、もう、どんなにしゃべりまくっていても、静かにさせる魔法をつかんだ私である。

「八釜やかま 四釜しかまで 十二釜かま。八やめろ 八やめろで十六だ。

四つ 四つ 四つ は 十二だね」。最後のしっ しっ
しっ……のところは声をおとし息だけで唱え言い終
わったら ニタツと笑う。これが極みつきである。まる
で魔法にかかったように静かになるから愉快である。

おやつや給食を「もつと」「もつと」と催促する子に
は、「根つきり、葉つきり、これつきり」と言ってみると
ニコツと笑ってあきらめてくれる。

「はい」ではなく「ああ」と返事した子には「あかに粟
飯、こうこに茶漬け、うまくななくても たんとおあが
り」と言ってみる。こんなうれしいことはないと言った
笑顔が見られる。

子どもは、ユーモアのある先生、よく笑う大人が大好
きだ。保育者の専門性のひとつに私はぜひとも「よく笑
うこと」「ユーモアのセンスがあること」を入れたいと
思っている。

子どもは「一人でトイレに行けたの」「ごはんをみー
んな食べられた」など、日常生活の実にささいなことを

喜びとして生きている。そんな小さな事こそ大事なのだ
と私は学ばせてもらった。

以前、中国と日本の合同調査でそれぞれの国の長寿の
方を調べてみたら「楽道家であること、好奇心いっぱい
の人であること」がその共通点だったと話に聞いたこと
があった。まさに、子ども性と重なる心の働きをもって
いるということである。そのような、子どもたちの笑い
が、乏しくなってしまうことは、生きる力、未来に夢を
ふくらませる力がしぼんでしまうことである。ほんとう
に子どもの笑いが少なくなっているのか？ まずはその
実態を何とか見える形に表し、子どもたちのSOSにしま
り応えたい。そう思っている私は、今、数人のなかまと一
緒に「子どもの笑いと自我の育ち」に関するアンケート調
査に踏み切った。次回は、その結果と、笑いがなぜ自我
の育ち（自発性と自律）につながるかを述べてみたいと
思っている。

（東京成徳短期大学）



ある日

撮影・平野 清





障害をもつ幼児の保育(9)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

手を使うこと その四

F 以前から私は、手がコミュニケーションにどのような役割を果たしているかを考えたいと思っていました。手のコミュニケーションと言うとすぐに手話とか、その訓練に発展しやすいのですが、そうじゃなくて言葉がなくても手や体で心が表せるのではないかと、現にやってみるんじゃないかと思ひ、そこを取り上げて

みようと思っています。

また小さな孫のことになりますけれども、声の代わりにだんだんと手がよく利くようになってきて、あんまりはつきり指さしをするので、その指さしはどういう意味があるんだろうかとか、それから最近になつたら人の手を取って自分のやってみてもらいたいことをやら

せるといふようなことが始めてきたんです。そのあたりをちよつと話してみてください。

言葉の前のことば

M 言葉話さない愛育養護学校の子どもたちが心の中でどんなにいろんなことをいっぱい考えているかということはずつと思つてはいたんだけど、最近になつて私どもの家に生後一年の赤ん坊が来るようになって、その子を見てると、言葉話す以前にいろんなことを手でしゃべつてるといふことにいま気がついていきます。私が前に思つていたよりもつとつとそうだといいことにいま驚いています。

F そう、言葉の前のことばについていふことを実感としてとらえましたね。

M うん、その赤ん坊に接して、言葉話さない障をもつ子どもたちがどんなにたくさんのかを心の中で考えているかといふことをとてはつきりと分か

たよな気がするんです。昨日その赤ん坊が私どものところに来たときに、その子があなたの手を取り、自動車を描いた絵本の上にその手を持つていきましたね。そしておばあちゃんに読んで欲しいといふみに顔を見たんです。それであなたが自動車のところを読み始めた。読み始めたといふかお話をし始めた。この頃この子は自動車をとつても好んでいて、外に行つても自動車をじつと見るし、特にタイヤを気をつけて見ます。それから自動車の絵本を自分は見てるんだといふことを得意気に示します。それだけじゃなく、人の顔を見て、ここを読んでくれといふふう指で示すんです。それはこの頃とつても顕著なことなんです。

F そこで私はその本を読んで「ブーブー」とか「赤いブーブーがいたね」とか話してあげる。赤ん坊は言葉なんて全然なしで、ただ私の手を握つて「はらっ」といふように自動車のタイヤのところ私の人

差し指を持っていくんです。そして「ね？」っていうような表情をします。そうすると私も自然にブーブの話をしてあげることになるんですね。それは意識しないでいて、子どもが興味を持つてる対象に向かう気持ちとそれを私にも一緒に共有しようよって誘いかけてるように自然にそういうふうになって、それに受け答えることになるんですね。それがとても私は不思議でした。

M 私もね、この子とよく道路を手を引いて歩くんだけど、この子は自動車のことをいっぱい知ってるんです。何を知ってるかっていうのはいろいろあるんだけど、例えばいつも停まってる自動車のタイヤのところに行って自分が手に持ってきたミニカーをわざわざそのタイヤの隙間の中に落とすんです。もちろん停まってる自動車ですよ。そして僕がその玩具のミニカーを探してその子に渡すと、またその自動車をタイヤの隙間に落とす。それから家の近くの道路に自動車

が通ると緑や赤のランプがついたり消えたり点滅する標識があるんで

す。それを手でさわって僕の顔を見る。つまり自動車が通ると標識が点滅するんだよと知らせるんです。

「あーあー」とか「うー」とか言うだけだけど、この子はいっぱい頭の中で思っていることがあって、ほらここんところはこうなるんだよ、ああなるんだよ、と言って説明するように私には見えるんです。

F 何回か前に、物を手でつかむことが自我の発生につながるってというような話をしましたけれども、物と自分だけじゃなくて、そこに第三者がもう一人介在して、一緒に「すごいねー」と言ったり喜んだり共感したりする、それが言葉を広げ、思いを広げていく元になっているんじゃないかなって思いました。それはどうでしょうか。



M 言葉を話さなくてももうすでに子どもは話したいことがいっぱい心の中にある。で、それをどうやって相手に知らせるかかっていったら言葉ではなくて絵本の上に人の手を置いて顔を見るっていうような、そうやってその思いを伝えようとしている。赤ん坊の成長というところを見ていて、なんだかすごいもんだと思うんです。

子どもが手や体で示すことを

大人は想像力と繊細さで理解する

F そうやって考えてみるとね、愛育の子どもたちは言葉を話せない子がほとんどだけれども、その子どもたちと一緒にいるとなんでもだいたい分かっています。複雑なことは分からないかもしれないけれどもだいたい分かっています。私たちは当然のようにして過ぎてきたけれども、大切なことだと気が付きました。たとえば、

ひとりの子どもが鍵のかかったドアのところへ私の手を持って行って、ここ開けろっていうようにガンガン叩いていたら開けてあげたいと思う。それから鍵がなく、「困ったなあ」って多少大きさにポケットの中に入れて手を突っ込んで、「ほらないでしよう」っていうようにすると向こうも「困ったなあ」って一緒に困っていたり、そういうことがいろいろあったのを思い出します。

M 鍵がかかっているとをドンドン叩くのは、「開けてくれよ」って言っているというふうに僕らはすぐに考える。そしてドアを開けたら次は外に飛び出してしまうだろうというふうに先取りして考えるけれども、実はその中間にまだいろんなことがあるんですね。鍵を開けると向こう側にいろんな物や道具がある。もし子どもが言葉をしゃべったとしたならば、そんなことがいろいろあるに違いない。そこまで僕はいままであまり考えなかった。すぐに開けていいんだろ

うかと迷ったり、「開けろ、開けない」だけに集中して考えていたけれども、その中間にその子のいろんな思いがたくさん詰まっているのだから、まずそこをころを考えなくてはいけないんですね。前には見落としていて新たに発見したのはそういうことなんです。

F 私もその考えには賛成だし、ああなるほどと思いました。やってあげるかやってあげないかのどっちかかと思ってしまうけれども、もっと複雑にいろんなことを子どもは手でもって、また体全体で表現し大人に訴えている。だからそれに対して繊細に感えずなくてはいけないんだなと新しく気が付いたわけですね。

M ついに、三日前のことですが、僕と一緒に隣の幼稚園に遊びに行く子がいるんです。その子は他の子どものロッカーのところに行って、私の指を名札のところを持って行って指さしてその子の名前を読ませるんです。そしてロッカーの中に手をつっ込んでみる。それから隣のクラスに行ってまた同じようにやるんで

す。私は気が気じゃなくて、もし他の子どもの持ち物をその子が持ち出したりひっくり返したりしたらどうしようってことが先に立ってしまう。ところがその気持ちを持ちをちょっと抑えてその子と一緒につきあってみると、僕に名前を読ませるのは今日お休みの子なんです。隣のクラスに行った頃になってはじめて僕はそのことに気が付くんです。鞆がぶら下がってないところの子はお休みで、その子のところに僕の指を持って名前を読ませる。誰が休んでるかかっていうことを、そうやってその子は確かめている。いつも来ているあの子、この子がどうしてるだろうかということを考えてるのかもしれない。ああ、そんなことを考えていたのなら、ロッカーの前で僕はもつというんなお話をすることができなかったらどうかと考えてしまった。そういうことはまだまだいろいろある。

F 本当にそう言われてみるといろいろあってロッカーのところに行ってお弁当の袋をいじっていたら

「お弁当が食べたいの？」って言う。「時間はちよっと早いけれどもお腹がすいたんでしよう、お弁当食べる？」なんて言っ出て出してあげるとか、それくらいまでの理解はあるんだけどもつと複雑なことを言ってるのかもしれない。「今日は好きな食べ物なんだ」とか考えているかもしれない。「食べる？ 食べない？」って言ったり、「早いんじゃない？ 遅いんじゃない？」とかっていう。そんなことはわかり実用的に考えてしまったけれどももつと豊かなものがロッカーのところへ行っお弁当の袋を触ったということの中にあるんでしょね。それにやっとな気が付いたのですね。

M その通り。本当にもつと複雑ないろんなことがいっぱいあるだろうということが、いまだったら僕はもつとよく分かる。だけど、その時には思いつかないんですね。

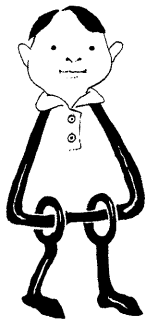
F 大人はもつと豊かに想像力をめぐらせなければな

らなかつたんだということに思い至ったんですね。そうしてみるとずいぶん頑張ってよくつきあつたなあと、一人一人のことを思い出しますが、頑張ってつきあわなきゃならなかつたのはそれだけあんまり理解しないでつきあっていたから頑張らなきゃならなかつたのかな。その点はどう思いますか。

M それはね、その通り。その通り。もつと想像力を広げて考えれば別のつきあい方が出てきたんじゃないかということを考えますね。

手と顔の表情に興味をもつ

M ずいぶん前のことだけでも一人の男の子がいつも「あーあー」って言っ出て声を出して歩き回っていました。その子が、ある時じつと座つて絵本を見ていることがあつたんで



すね。その絵本を私も一緒に座って気を付けて見ているうちに気が付いたことは、それは手を描いた絵本だったんです。何か一つのものできあがるまでを、一、二、三、四というふうに順序よく連続写真が撮ってあって、手と指の写真がのっている図鑑でした。私はいつともさまよい歩いているように見えたその子が手の写真をこうやってじっと見ているのは、よほど手に関心があるのだろうと思って、マジックペンを出すと、その子はそのマジックペンでいろんなものの上に色を塗り始めました。河原で石を拾ってきたらその石にその子はいろんな色で塗って、一つの石がまるで宝石のようにキラキラ輝いて、お母さんとお父さんが「この子こんなきれいに色塗って宝石みたいだ」って言ったりますます喜んで、しばらくの間石に色を塗るっていうことをその子はとてましたね。そうやって、私がその子の手に気が付いたときにこんな面白いことが次々に開けていったんです。

F その人は何でそんなに「手」に興味を持ったのかしら。「手」を使いたいと思ったのかしら？

M それもあるだろうし、何で手に興味を持ったのかってのはたった一つや二つのことじゃなくていろんなことがあったと思います。いまだったらさっき話したようにその子を取り巻くいろんなことを考えたでしょうね。

F あの子はよく人の手を引っ張って連れ歩いていましたね。

M その子は僕を呼びに来て、顔をじっと見て、それから顔を隠して「いないいないばー」をしました。

F 顔の表情に興味があったんでしょか、その子は。

M それもその通り。手の写真と同時に顔の写真にも興味をもった。顔の表情の変わる写真にもとても関心があった。

F それは普通には本で見て学ぶというよりも、人の

顔を見て自然に学ぶことだけれども、その子にとっては本で学ぶ事柄だったのかもしれないわね。

M 本だとはっきりいろんな表情が見える。それによつて実際の人の顔を見たときにもいろんな表情があるということに気が付いたのかもしれませんがね。

F なるほどね。表情からその人の考えていることを学ぶのでしょうか。

M そのことは手に対する関心だけじゃなくて、つまり人に対する関心だったのですね。私の家に来る赤ん坊のことを考えても、こつやつてあなたの手を引つ張つて本の上のせたときに、そのたびにあなたの顔をその子を見る。この人は自分のことを喜んでくれるのか、自分のことをどう思つてるのかというように顔を見るんです。そして手を絵本の上のせる。これは言葉であらわすと難しくなるけれど、実際にはとても単純なことです。

指さしについて考える

F 話は元に戻りますけれども、指さしについて、自閉症と言われる人たちにとって非常に意味があることとして論じられたことがあったでしょ。指さしをすると言葉が出るとか、人に関心があるとかそういうことが言われたことがあるけれども、あなたはそれをどういうふうにとらえてるんですか。

指さすときには、自分と対象になるものとの関係をとらえるだけじゃなくて、そこにもう一人共感する人が必ず生じてくる。そうしてそこで人間同士（自分と親しいお母さんなり先生なり）が共通にそのものに対して気持ちが向かうことが大事だと思えます。そしてただ自分が物を見つけその物をつかまえるっていうだけじゃなくて、もう一人の人もそれに関心を持つてたろうと子どもが思う。かなり幼い子どもがそう思うっていうことが非常に不思議なことだし、本当にそ

ういうふうには発達するのかって思っていたら、うちの赤ん坊がブープの絵を見るだけじゃなくて、一緒に私の手を持って行って「これ見てよ」って言うようにすることに思ってきたので、三つの頂点を持った三角形の關係かなと思っただけです。

M 確かにその通りでしょうね。「指さし」は、「指」つてところに強調点があるけれども、指は単なる指じゃなくて、子どもの心の全体がそっちに向いているということでしょう。その子は指さす前にね、天井に輝いてる電灯をじーっと見るといふところから始まったんじゃないかしら。そしてそれからしばらくたってからそこに指が加わったというか、それをまたこちらと一緒にいって「あ、これね」なんて言っている。いまあなたが言ったように共感しながら、手を上げたり指を上げたりしている間にその子は今度ははつきりと指さすようになって、それから自動車の絵本を持ってきて、今度はここは指さしじゃなくなつてあなた



の手をその自動車の絵の上に置いて、そしてそこを

お話をしろって言う具合に促していたんですね。そこがなぜ指なのかっていうところはすぐには僕は言えない。心が向いていなくて、外界に対していろんな関心があるかどうかってところが大事なんじゃないかなって思うんです。だからお母さんたちが「この子は何にも指さししないから大変だ」って思うんじゃないかって、いろんな物に関心を持つようになると、電気がついたら「あー、電気ね」って一緒に言ったり、今度は電灯のスイッチを消したら「あら、消えちゃったわ」とか「あら、ついたわ」とかって言つて一緒に楽しむ。そうするとそれ

はとても子どももの気持ちを開く。デリケートで人に対して開きにくい気持ちの子どもだつてあるわけだから、子どもと遊びながら見ていることが大事なんじゃないかなつて思つたんです。指さしをするかしないかつていうそういうことではなくて。

M それは僕も賛成です。その指さしをするときに、大概の子どもはその前に「近寄つて来る」というところがあります。

F ああ、なるほど。

M 指さす前に「近寄つて」来たつていうことは、その子がその人に関心があるだけではなくて、その人に何か話したいことがあるときじゃないかと思うのね。

その近寄つて来たときにすぐにそれを断わらないように僕は非常に気を付けなくちゃいけないと思つています。近寄つて来たつていうことがね、もうすでにお話をしてるといふことの門口なんじゃないかしらね。

F デリケートな子どもはそういうふうにおそるおそ

るしているし、自分の気持ちをむき出しに出すなんてそんな恥ずかしいことは嫌だと思つているから、みんな隠しながらそれをやるもんだからこつちも受け取りにくいし分かりにくいんです。隠しながらでもそこまです近寄つて来たらそれはずいぶん大事なことなんですね。

M 障碍をもつ幼児の保育というテーマで手のところをやつてるわけけれども、障碍をもつ幼児は、いまあなたが言ったようにとても繊細な子が多いからそれを隠しながらおすおすとやつているので人の目に付きにくい、それをちゃんととらえて、こちらも自分の向きを変えて応えていくところが、いま手の話からよく分かつたような気がします。

ちよつとした緊張感から感じたこと

吉岡 晶子

年長の生活も後半になり、子どもたちの姿に成長を感じたりまだまだと思ったりする。つつい願いと期待とで、こんなはずではない、もつとしっかりやって、もつともつと……私の気持ちが先走り子どもたちの気持ちとのずれを感じるときがある。でも、ハッとさせられ考えさせられた出来事があった。

ある朝のこと、チャボの餌にと大根の葉が届いていた。子どもたちと刻もうと机や包丁を出して準備をしていると、年中組のA子とB子がやってきた。この二人はここ数日チャボを抱きにくいていた。「やりたい」と嬉しそうに言う。私も「葉っぱを切りたいの？ そうなの」と応え、「ここにすわってね」と二人を椅子に座らせた。そこへ年長児のM子とN

子が通りかかった。この様子を見ていたので「やりたいんだって」と言うと、N子の表情が一瞬堅くなつた。じつと二人を見ながら何やら考えている。この反応は、私には意外だった。どうなるのだろうか。とどきどきしてしまつた。するとN子は「じゃあ、私たちが包丁で切るから、切つたのをお皿に入れてくれる?」と言つた。「それでいい?」と聞くと、A子とB子はにこにこして「うん」と頷いた。

クラスの中では一番生まれが遅く体も小さいN子、日頃は友だちについていったり声をかけて貰つたりしているようなN子。この時のN子の真剣な表情にはいろいろな思いがあつたのだろう。包丁はちよつと危ない、大丈夫かな、どうしたらいいかな。あつさりいいよとは言えないな”と考へていたのではないだろうか。そして出した結論がこうであつた。

N子の真剣な表情、出した答えを聞いて私は嬉しかった。N子には、年中兎にやらせてあげたいとい

う気持ちがある。包丁は危ないということへの緊張感は、私以上にあつたようだ。その中で「私なんかかしくちや」という緊迫感があつたのだろう。必死で考へた。その気持ち、姿勢にN子の成長を感じた。ちよつとした緊張感から生まれるその子の力を感じた。このような体験を子どもたちは日頃もつとしていたのではないか、ついつい足りない面に目が向いてしまい、そういう場面に気付いてあげていなかった、という思いになつた。そして、この様な場を、私自身もつと生かして関わっていくことが、一人ひとりの物事に取り組む姿勢の育ちに繋がるのではと感じた。

N子はひざまずいて一生懸命に大根の葉を刻んでいる。A子とB子はリラックスして椅子に座ってお



り、嬉しそうに時々刻んだ葉っぱをお皿に入れていた。しばらくして様子を見に行くと、今度はA子とB子が刻んでいた。

十二月の防災訓練の日の出来事。園内ではそれぞれ思い思いに遊んでいるときに合図があった。子どもたちは、とるものもとりにあえずその場にしゃがんで放送を聞き、全員で学外に避難した。年少組と年中組は保護者が引き取りに来て降園したが、年長だけは安全を確認したということで幼稚園に戻った。

幼稚園に戻ると、当然そこは嵐のあととでも言うような状況。園庭も砂場も遊戯室も、もちろん保育室もすべて遊んだまま、使った遊具はそのままやりっ放しの状態。そこで、みんなに「幼稚園は遊んだまま、おもちゃもみんなそのままになっている。いま、ここにはあなたたちしかいない。みんなで幼稚園を片付けよう」と投げかけた。まだ避難訓練の緊張した雰囲気が続いており、子どもたちは「う

ん」と頷いていた。

「きょうは、どこを片付けるかは、並んでいる順番にするね」と伝え、「この六人は森の組。次の六人は林の組。次の六人は遊戯室……」と分担を決めた。「では始めよう」と声をかけるとパッとそれぞれの場所に行った。この時、だれも「ぼくはどこ?」「わたしは?」と聞きに来なかった。普段はそうなりがちなT夫、Y夫もすぐに行動していた。この動きはいつもの片付けの時とは全然違って機敏だった。

それぞれ分担で任された部屋でどのようにしているか様子を見に行ってみた。森の組のメンバーは男児の中に女兒が一人という組み合わせ。もともとあまり遊具が散らばっていなかったこともあって、早くきれいになってしまい、担任の先生にフォローしてもらいながら「あとはどこをやればいいのか」と聞いたりしていた。

林の組ではK子が中心になって片付けていた。私

が行くと「ここからやってるの」とままごとコーナーを片付けており、二度目に見たときはみんなでせつせと机を運んでいた。「終わったよ」と自分のクラスに戻ってきたときにはいかにも「自分たちでやってきたよ」と言う表情であった。担任の先生が戻ってくるのが遅かったこともあり、自分たちでどのように片付けをすすめようか考えたらしく、いつものお帰りの時間のように部屋の中は椅子がきれいに並べてあった。

遊戯室は大型積み木、ブロックなど沢山のものがあった。ここは隣の海の組のメンバーと一緒の片付け。量が多いので大変かなと思っていたが、部屋に入ったときの印象が「みんな嬉々としている」という感じだった。いつもは、片付けを要領よくすり抜けがちだったり、消極的なメンバーもいそいそと動いていた。予想外に早く片付け終わって保育室に戻ってきた。あまりの早さに驚いて「もう終わったの？」と言うと「ぜんぶ終わっちゃったよ」と、

とても嬉しそうだった。

感心したのは保健室でのことだった。保健室を分担のひとつに入れそびれていたが、自分たちの分担のところが終わった人たちが気付いて片付けていたのである。一瞬、絵本を見ているのでは（保健室に絵本コーナーがあるので）と勘違いして一言言いそくなったが、なんとかわわずに済んだ。ほかにも園内のいろいろなところを片付けていた。勿論他の先生方のさりげないサポートがあつてのことだが、「わたしたちがやらなくちゃ」という使命感が前向きに行動させていたように思う。

この時の子どもたちの様子に、みんなすごい、みんなこんな力があるのか、と見直してしまった。いつも遊んでいる仲良しの仲間とは違う偶然性で決



まったグループ。年長のこの時期ということもあるが、そういうメンバーでも、目的を一つにして行動出来るということ。その時の引き締まった気持ち。そこからくるエネルギーを感じた。年長組だけしかないということでプライドをくすぐられ、自分たちは大きいんだという気持ちになれたことや、目的が分かりやすかったことなども子どもたちの気持ちをこうさせていたのだろう。目の前の新しい状況に気持ちをしっかりと向けること、自分の身を置くこと、そのことが一人ひとりの育ちに繋がることを感じさせられた。やる気を引き出してあげること、引き締まった気持ち、緊張感からくる集中力、行動力を発揮できるような場を生活の中で生かしていきたいと思った。

片付けに時間がかかった園庭のメンバーも戻ってきてから、みんなでお弁当を食べたときには、きつと集中してやり遂げたあとの達成感を感じていたと思う。

思い出してみると、ハンドベルのときもハッとさせられたことがあった。一学期のことである。女児たちはすでに「ちようちよ」や「チューリップ」などの曲を友だちと何人かで演奏していた。なんとか曲らしくなってきたおり、お客さんの前で演奏し、聴いてもらったり見てもらったりして達成感を味わったりしていた。そのようなハンドベルとは違うシーンに出会った。

ある日、保育室にはあまり人がおらず、静かであった。ド・ド・ソ・ソ・ラ・ラ・ソ：ベルの音が聞こえる。部屋をのぞいてみると、三人の男児がピアノに向かって立ち、立てかけてある譜面をじっと見ながらキラキラ星をやっていた。譜面といっても、ドレミを書いてベルの色と同じ色で印をつけてあるもの。私には三人の後ろ姿しか見えない。この三人はあまり楽器を手にしたことはなかった人たち。意外だった。ちよつとたどたどしく音を繋いで、ひとつひとつ丁寧なベルを鳴らしていく。やり

方はよく分かっているようだ。集中していて緊張感が伝わった。私がいることは気付いていない。三人の気持ちが一いつになつていた。友だちの音を聞きながら自分の音を鳴らしていく。曲が終わった。三人の背中がゆるんだ。私もホッと力が抜けた。思わず拍手をすると、三人は振り向いてニコッと照れくさそうに笑った。

このシーンが思い出された。あの後ろ姿からくる張りつめた感じ、そのあとの満足感。プレッシャーや力みではなく自分から真剣に取り組む気持ちになつたがゆえの緊張感。それを体験したことが本人たちにもたらしたことがきつとあつただろう。

最近、子どもたちは投げごま回しに挑戦している。瞬間的なことだが、ごまを回すときの力の入れ方抜き方にも通じるところがある気がする。まだうまくごまを回せず「先生、やって！」と言われて手を添えて手伝うときに、本人の力の入れ方が伝わっ

てくる。力が入りっぱなしだと大抵失敗するが、「投げるときはやさしくね」と言葉添えると、構えたときには身体がピリツとしていても、投げる瞬間に力が抜けて成功したりする。その時の嬉しさは格別。あの緩急のバランスが大事であり、そういうことが生活の至る所にあるように思う。力を入れたままでもだめ、抜いたままでもだめ、スツと力を入れスツと力を抜くこと、それを積み重ねていくことが物事にきちんと立ち向かうことにつながるのではという気がした。

チャボの餌の出来事から、思いつくままに今までの生活の中で感じたことを振り返ってみたが、日々の小さな出来事をもう一度見つめて、一人ひとりの物事への気持ちの向け方を支えていきたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

今月から新連載が始まります。村田愛先生には「ポジティブサポートの世界」を六回、今井和子先生には「子どもと笑い」を二回書いていただきます。浜本昌宏先生の新企画も始まります。どうぞご期待ください。

そして、今月の特集は「はずむ」です。四人の方に書いていただきました。読んでいる私にも、心が、身体が、活動が、会話が「はずむ」気分が伝わってきました。

倉橋惣三は、「春の遠足」の中で次のように書いています。

日はほかほか、風はそよそよ、四

*

月の空は外へ外へと子どもをさそう。広い野原へ出たい。小高い丘へのほりたい。動物園を見にゆきたい。植物園で遊びたい。きょう遠足という朝の子どもたちのうれしい顔、よるこぶ声。……おとなにはほんの近足の距離でも、子どもには楽しい遠出です。いわば、平生の限られた遊びから、もっと思いのままに駆けまわれるところ、もっといろいろな変わったものに接せられるところへ、足をのばし、目をひろげさせてもらいさえすれば楽しいのです。〔子どもの心とまなざしで〕フレーベル館

*

遠足の朝の、心はずませている子どもたちの楽しげな気分が、読んでいる私にも伝わってきて、私の心もはずんできます。

(仲)

幼児の教育

第一〇二巻 第四号

(二〇〇三年四月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年四月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二二-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。